

文明を歩く

ーチュニジアでのフィールドワーク体験記ー

中田 真菜美さん(経済3)



▲エル・ジュム円形競技場で(前列右が中田さん)

チュニジアでフィールドワークを行った中田真菜美さんの体験記が寄せられた。

メンバーに助けられ成功した旅

私たち佐竹弘靖ゼミ(教養演習)メンバー10人は、昨年1年間「文明を歩く」というテーマでチュニジアの文化や風土などを調べ上げ、最終課題として2月23日から3月9日まで現地にフィールドワークに訪れた。

北アフリカに位置するチュニジアは、西はアルジェリア、南はリビアに国境を接する国で、北東側一帯は地中海に面している。日本の半分ほどの国土しか持たない小国だが、現在、自然遺産も含めた世界遺産が8つもある。国民の9割以上がアラブ人。国教はスンニ派イスラム教で、国民の約99%はイスラム教だが、中近東諸国のイスラム圏に比べると、戒律はそれほど厳しくない“ソフトムスリム”の国だ。

日本にはあまり馴染みのないチュニジアでの研修で、想像以上の興奮と感動を受けた。私は遺跡や文化はもちろんのこと、人々の考え方や風習に興味があった。幸運なことに、首都チュニスのブルギバスクールで現地学生との討論会が設けられ、参加することが出来た。若者について、日常生活についてなどのテーマでは日本と何ら変わらず、盛り上がった会話の中から共通点を見出すことも出来たが、やはり宗教や政治については、そうはいかなかったようであった。しかし、それは想像どおりでもあり、国を超えての会話であると実感した。



▲佐竹教授(後列中央)と全員で記念撮影

旅は、チュニス付近から南方へ進んだ。首都近くはホテルも町並みも何もかもがきれいで、公園には噴水があったが、南に進むにつれ、シャワーのお湯が出なくなり、暖房器具がなくなり、水が出なくなるという、目に見える“変化”が楽しくもあった。過去20年間、何不自由なく生活してきた私には、貴重な体験であった。多少のことでは動じないつもりだったが…。現地に行き、体験することで得たものが、今、私の中で根付いている。

チュニジアでは多くのことを学んだ。文化、生活はもちろん、旅の生活や自己責任。現地の人々にはお世話になったが、それ以上にメンバーに助けられ成功した旅だと強く感じる。途上国チュニジアは近い将来、急速に発展していくであろう。ぜひ5年、10年後にもう一度訪れたい。

地域密着でフェアトレードPR

室井義雄ゼミ



フェアトレードをテーマにした地域イベントに、経済学部国際経済学科の室井義雄ゼミが参加。ファッションショーのモデルなどを務め、フェアトレードPRの一翼を担った。

フェアトレード(公正な貿易)は、途上国での生産者の製品を扱うことで、経済的自立、持続的な生活向上の支援を目指す。「発展途上国の経済」がテーマの室井ゼミでは、鳳祭に同商品を出店するなど、その精神に高い関心を示している。

5月20日夕、登戸駅前商店街のフェアトレード雑貨店「カンデラリア」のオーナー・田代美香さんが、近くの無国籍・オーガニック料理店「アリエルダイナー」でファッションショーを開くのに際し、室井ゼミに協力を求めたことから実現。当日、ゼミ授業を終えた室井教授はじめゼミ生、卒業生ら約30人がかけつけた。トークショー後のファッションショーでは、ゼミ生が司会、モデル、着替え手伝いなどの裏方も務めて大活躍。最新のフェアトレード・ウェアをまとったゼミ生が登場するたびに、満席となった店内から、歓声と拍手が沸き起こった。

室井教授は「フェアトレードというキーワードを通して、いい出会いが生まれ、広がりのある活動が出来たのでは」と話していた。モデルにチャレンジした吉田瞬介くん(3年次生)は「思いつき楽しみました」とにっこり。

【ニュース専修2004年6月号12面】

新入生1500人来場 新たな企画も好評

第37回青衿祭



▲アトラクションやライブで大いに盛り上がった。

新入生を歓迎する連合県人会主催の「第37回青衿祭(せいきんさい)」が6月5日、渋谷公会堂で行われた。新入生ら約1500人が来場し、連県有志によるアトラクションと『DOMINO88』『SOFFet』のライブを楽しんだ。二瓶恵介実行委員長(経済4)は「連県役員の紹介ビデオを上映するなど、新たな試みを行いました。来場者の反応も良く、満足しています」と話し

【ニュース専修2004年6月号12面】

草書の古典を臨書学習

—中川恭司教授指導「書道Ⅳ」—



▲中川教授(右から2人目)の指導を受けながら臨書に励む

仲川恭司文学部教授指導の「書道Ⅳ」は、草書を学ぶ授業だ。書体の中で最も点画が省略され、ひらがなの基にもなっている草書は、律動、簡潔の特質を生かし、流動美をもって表現出来る芸術的要素が強い書体。授業では歴代の草書の古典を臨書学習しながら省略法、用筆法を学ぶと同時に、高まいた東洋的美学に触れる。

5月19日、生田キャンパ

ス2号館書道室の授業では東晋時代、王羲之の遠宦帖(將軍を辞する時の手紙)の中の「足下懸情武」を臨書した。学生たちは丹念に墨をすり、古典と相対して毛筆を動かし練習を重ねた。仲川教授は学生一人ひとりに「たっぷり筆に墨を含ませて」「字体の形だけを追ってはならない」……と、作品に朱を入れながらアドバイス。「1時間半の授業でも随分上達します。書道は、繰り返し、繰り返しの反すうを重ねることで、冷静にもものを見る目が鍛えられ、自らを成長させる芸術といえるでしょう」と、書道の奥の深さを説く。畳の教室で正座をしての授業だが、出席学生は「雰囲気はとてもアットホームで楽しいですよ」(3年次女子)と話している。

【ニュース専修2004年6月号12面】

生田キャンパス内にコンビニがオープン



生田キャンパスの旧購買会別館跡地(5号館南西側)に、コンビニエンスストア「アップルマート専大生田店」がオープンした。(株)専大センチュリーが学生、教職員の福利厚生の一環として協力提携している。2階は季節ごとの催し物会場となる。営業時間は月～土の8時から20時。(状況により変更の場合あり。祝祭日及び授業のない期間は休業)。

【ニュース専修2004年6月号12面】